

2016

熊本地震における当院血管造影室の装置等の被害状況と考察

¹国立病院機構 熊本医療センター

深松 昌博¹

【背景、目的】平成28年4月14日から16日にかけて群発した震度5強以上の地震により、当院も多くの被害に見舞われた。救急救命センターを有し、災害拠点病院に指定されている当院（診療科33、病床数550床）の血管造影室2室における装置等の被害状況について報告する。

【装置等の被害状況】1. 循環器用血管造影装置Cアームの0度ポジションが5度ほど傾いた。2. モニタが転倒・転落によりレポート作成用液晶モニタ1台が破損した。3. 16日の本震時に30分停電し、機械室空調電源・画像サーバー電源・ワークステーションのGateway PCの電源が落ちた。4. Rotablator用の窒素ガスボンベが倒れた。5. Device棚が転倒・転落し、一部破損した。6. 薬品棚が転落した。

【考察】当院の血管造影装置は、無停電電源装置（UPS）や保安用電源に繋げておらず、余震で電源が落ちた場合に常用電源復旧後に再立ち上げが必要である。当院の耐震構造の建築物で今回、震度5以上の地震4回において、最大震度6強のあとのみ停電があった。常用電源において停電時間30分と、装置状況の確認や電源再立ち上げで装置等が使用可能になるまでに、さらに1時間ほど時間を有した。その間、UPSと保安用電源は利用可能であった。余震が続く中での検査、治療の実施は判断が分かれるところであるが、災害時において安全な検査・治療を実施するためには、UPSが配備接続されている血管造影装置を有する施設への搬送や震源地から遠く離れた施設へのドクターヘリ搬送が重要である。